巡視船「いず」船内を取材後、乗組員と＝今年2月

# 海蝶ノート 1

# 2歳の私 転覆事故で海中へ

吉川英梨

突然ですが、みなさんの最も古い記憶は何ですか？

家族との思い出、イベントごと、日常の一コマ、いろいろあるかと思います。

実は、私の最も古い記憶――。

海の事故なのです。

とは言っても、118番するほどのものではありません（当時はまだ118番運用前ですね）。昭和54年ごろ、場所は第九管区海上保安本部、金沢海上保安部管内にある、某海水浴場でした。

父方の親族、総勢20人くらいで海水浴に出かけた日のことです。私はまだ２歳、水着も持っていないお年頃、写真を見ると、パンツ一丁で母に抱かれています。

２歳上の兄も含めいとこたちなどの子供は、上は小学校高学年から10人近くいたと思います。私はいちばんちっちゃかった。

当時、私たち家族は埼玉県に住んでいました。父は、故郷金沢の懐かしい海で、親族揃（そろ）っての海水浴に相当はしゃいでいたのだと思います。（ちなみにこのとき、父はまだ29歳。忍海仁より若い！）

「ボートを借りて沖まで出まっしーね！　ブイの向こうに行くぞい！」（方言あってるかどうかわかりませんが、こんな感じ）

父は子供たちに声を掛けたらしいのですが、みな怖がって首を縦に振りません。４歳だった兄も嫌がり、母も反対。叔父や叔母も「今日は波が高いけ、やめときまっしーね」と止めたといいます。

父は聞きません。でも１人で行くのもつまらない。というわけで、父は母の腕に抱かれていた２歳の私をひょいと持ち上げ、ボートの上にそうっと置いて、

「英梨ちゃん、行くぞい！」

問答無用で出航です。

まだ２歳でしたが、よく覚えています。ボートの向かいで、青い海水パンツの父が、ニコニコしながらオールを漕ぐ。ただ、波が高いし、そもそも波打ち際です。すぐ砂浜に押し戻されてしまうので、全く沖に進んでいなかった記憶があります。大人の太腿ぐらいまでしか水深がないところで右往左往していたようです。ここからは私の想像ですが、打ち寄せる波にあおられ、ボートが波と平行になってしまったのではないかと思います。横波を受けたら手漕ぎボートなんか簡単にひっくり返りますよね。

で、その通りになりました。

ボートの横っ腹が持ち上がり、白い泡と波が青い空にパアッと舞い上がる。父の姿が見えなくなりました。次の瞬間にはぶくぶく……私も海の中です。沈んでいきます。

不思議なもので、スローモーションのように当時の場面を覚えています。ちょっと緑がかった北陸の海の色と、自分が吐く小さな気泡、ボートが作った大きな気泡がぐちゃぐちゃに、縦横無尽に目の前を通り過ぎていく。

まだ２歳ですから、死ぬとか怖いとかもわかりません。息ができなくて苦しい、という記憶もない。ただ海の色と、気泡の勢いだけを、見ているしかない。

話は飛びまして、拙著『海蝶』でも、潜水士が吐く気泡をたびたび描写しています。私はダイビング経験がないうえ、チャレンジもできない（蓄膿症）ので、映像や写真でしかそれを見ることができません。しかし、執筆中に描写しているときに、

「あれ。私、これ知ってる」

というわけで、金沢海上保安部管内で起こった手漕ぎボートプチ転覆事故のあらましを思い出した次第です。

私は何秒沈んでいたのかよく覚えていませんが、父にすぐに救出されました。水から引き揚げられ、空気と父の腕のぬくもりに触れた瞬間に、怖くなかったはずなのに、ウワーッ！　と激しく泣いたのを、これまたよく覚えています。

というわけで、『海蝶ノート』第１回目、いかがでしたでしょうか。タイトルの通り、『海蝶』執筆のうえでの取材や裏話などのエッセイを書くつもりが、一発目から『番外編』みたいになりました。

次号から本格的に『海蝶』がどうできあがっていったのか、書いていきたいと思っております。よろしくお願いします！

（つづく）

海との最初の出合い。左で女性に抱っこされているのが著者＝石川県内の海水浴場で1979（昭和54）年